

幸せの尺度 ブータン人の幸せ感に学ぶ

大橋 照枝

1976年以来、GNP（国民総生産）より、GNH（国民総幸福）を国是としているブータンは、国際的にもGNHを唱導する国として、首相が国連で、GNHの拡大を呼びかける演説をするなど、積極的である。

また2011年11月に、第5代国王が、王妃と来日され、その明るいふるまいが、日本人の心をかき立てたこともあって、ブータンのGNHは、日本人の幸福感に強い印象を与えた。

本論は筆者大橋が、10数年前から、GDP（国内総生産）では表わせない、HSM（Human Satisfaction Measure：人間満足度尺度）の開発のバージョンアップを研究する中で、第6及び第7バージョン（HSM Ver.6およびVer.7）として開発したものの紹介と、ブータンのGNHの考え方をさらに深めようとするものである。

基本的に、HSMの狙いは「持続可能な社会厚生指標」、つまり、HSM指標が「持続可能な発展」の定義にかなった構成になっていることが不可否である。

当初は、「社会」のカテゴリーと「環境」のカテゴリーと「経済」のカテゴリーの3分野で構成し、「持続可能な社会厚生指標」としてVer.5まで打ち出した。

しかし、Ver.6では、「民主主義」を政治のバージョンとして加えた。民主主義の必要性については、拙書『幸せの尺度——「サス

テナブル日本3.0』をめざして』（麗澤大学出版会、2011）にも書いたように、「最大多数の最大幸福」の提唱者、ジェレミ・ベンサム（Jeremy Bentham 1748-1832）（英国の哲学者、経済学者、法学者、功利主義の提唱者）は、“人々が幸福を求めることは善であり、政府の本来の目的は「最大多数の最大幸福の実現であり、それを実現する政治体制は〈代表制民主主義〉である”（ベンサム 1822、戒能通弘、2007、『世界の立法者ベンサム』日本評論社）としていた。

同様に、民主主義が人々に幸福をもたらすということは、アマルティア・センも（「比較的自由的なメディアが存在する国々では、大飢饉が一度も起きていない。かつてインドで大飢饉が起きたとき、それは食料が足りなかったためではなく、民主主義社会でないために、飢饉にある人たちの情報が、広く伝達されなかったため、食料の余っているところから、欠乏しているところにゆきわたらなかったため」と分析している。（アマルティア・セン、大石リラ訳、2002、『貧困の克服』集英社）

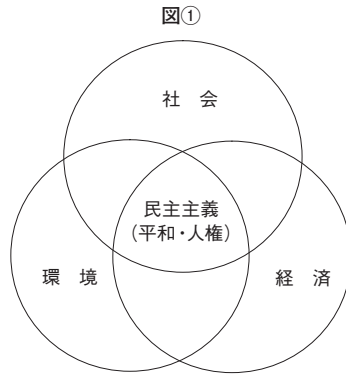
また、B. S.フライとA.スタッツァーは、『幸福の政治経済学』（ダイヤモンド社、2005）の中で「立憲民主政体の方が、政治家が市民の利害に沿った統治を行うという動機をもつだけに、人々の幸福度は高まる」と論じている。

そこで筆者は、HSM Ver.6で「民主主義」(政治)を折り込んだ(図①)。

ところで、HSMが「持続可能な発展」の指標であるためには、若い世代にツケを回してはいけない—ということ。つまり「子供の貧困率(18歳未満の貧困率)」「若者の失業率(18歳未満の失業率)」が全体の数値を上回っていないかが大事である。

表①では、HSM Ver.7として、Ver.6の「民主主義」と「将来世代の持続可能性」(若者の貧困率と15~24歳の失業率)を折り込んだ。

本来18カ国で計算しようとしたが、1990年

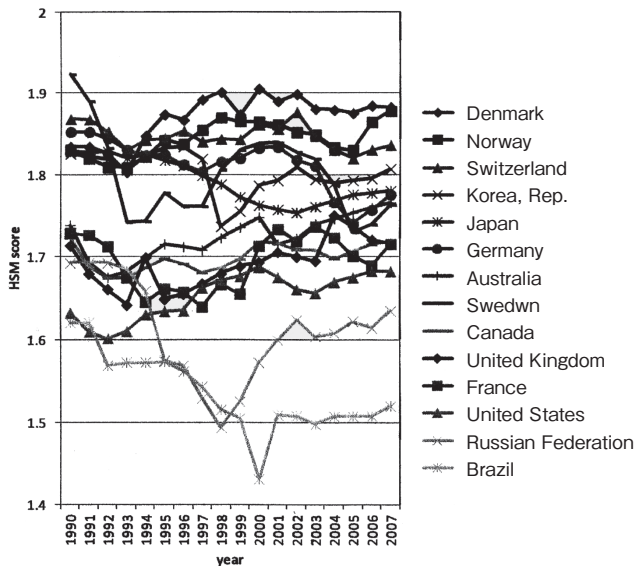


~2007年のデータが、完全に揃っていない国もあり、図②では14カ国で算出するに止まった。

表① HSMの構成 (Ver.7より)

<p>社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ①労働カテゴリ「失業率」 ②健康カテゴリ「乳児死亡率」 ③教育カテゴリ「初等教育の就学率」 ④ジェンダーカテゴリ「女性の4年制大学進学率」 <p>政治</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤民主主義カテゴリ「民主主義」「アノクラシー」「独裁主義」 <p>HSM Ver.6より導入</p> <p>将来世代の持続可能性</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥15~24歳の貧困率 	<p>環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦15~24歳の失業率 ⑧環境カテゴリ <p>HSM Ver.1 上水道の普及率</p> <ul style="list-style-type: none"> Ver.2-1 CO₂排出量 Ver.2-2 エコロジカル・フットプリント Ver.3-1 CO₂排出量 Ver.3-2 エコロジカル・フットプリント <p>以下、同じ</p> <p>経済</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑨所得カテゴリ「ジニ係数」
--	---

図② 「若者の失業率」と「子供の貧困率」のTotal HSMスコアの各国推移 (2007年順位で国順位は並び替えしたもの)



表② HSM Ver.7 に関する所見

<p>1. 今回のエクセルデータについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Y_unemp と C_poverty のシートに、若者の失業率と子供の貧困率のデータがそれぞれ入っています。(Youth's unemployment rate ということで Y_unemp、Children's poverty rate ということで C_poverty と表記しています。)(1990年～2007年) ・ HSM score_Y_unemp と HSM score_C_poverty のシートに、失業率と貧困率を HSM にスコア化したものがそれぞれ入っています。(1990年～2007年) $\text{HSM}_{Y_unemp} = \frac{1}{100 - P_{Y_unemp}^0} \times \frac{100 - P_{Y_unemp}}{100 - P_{Y_unemp}^0} \times 100 = \frac{100(100 - P_{Y_unemp})}{(100 - P_{Y_unemp}^0)^2}$ <p>P_{Y_unemp} = unemployment rate of 15-24 years old $P_{Y_unemp}^0$ is the policy target. $P_{Y_unemp}^0 = 0$ in this study. 以上の方法で計算しました。</p> $\text{HSM}_{C_poverty} = \frac{1}{100 - P_{C_poverty}^0} \times \frac{100 - P_{C_poverty}}{100 - P_{C_poverty}^0} \times 100 = \frac{100(100 - P_{C_poverty})}{(100 - P_{C_poverty}^0)^2}$ <p>$P_{C_poverty}$ = Children's poverty index (under 18 years old) $P_{C_poverty}^0$ is the policy target. $P_{C_poverty}^0 = 0$ in this study. 以上の方法で計算しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各国名の入ったシートに、その国の HSM_{Y_unemp} と $\text{HSM}_{C_poverty}$ をグラフ化したものが入っています。(1990年～2007年) ・ HSM_ver6 のシートに以前のデータをコピーしました。 ・ HSM_ver7 のシートに、今回の結果(若者の失業率と子供の貧困率)を加えた最終的なスコアが入っています。(横棒が入っているのはデータが足りなかったものです)(1990年～2007年) <p>2. 所見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回 2 項目を新たに追加した訳ですが、HSM の総スコアの順位変動はほとんどなかったため、若者の失業率と子供の貧困率が全体に与える影響はあまり大きくないように感じました。 ・ HSM のスコアは、各項目の割合の総和という形で算出されているのだと思いますが、HSM において議論しようとされている幸福度に、それぞれの項目がどの程度影響を及ぼすのかの重みづけが異なると思うので、割合という形で単純に合計した指標を用いることが適切なのかといった疑問は少々感じました。 	<p>2012/05/10 尾形成也</p>
--	------------------------

た。

図②の国別の順位は、2007年の順位で並び替えたものである。

この若者の失業率と、子供の貧困率を算出し、HSM Ver.7 を出す計算は、東北大学大学院の尾形成也氏に行っていたので彼の所見を紹介する(表②)。

以上の考察で、「持続可能な発展」の定義(将来世代にツケを回さない—幸せは現代世代だけのものではあってはならない)ということが説明できた。

ところで、理想の幸せとは、どういうあり方であろうか。「幸福立国」と筆者が呼んでいるブータンの生み出している幸せ感について少しずつ論じてみたい。

その前に、ブータンの国の成り立ちから見て行こう。

筆者はブータンの国全体を見て回ったことはないが、地図をみると高度な位置から、広い平地まで、きわめて多様な地形になっている。

直感的に思ったのは、第20回地球環境映画祭で大賞を受賞した「思いを運ぶ手紙」の映画の画面だ。監督はブータン人のウゲン・ワンディさん。

その画面は、ブータンの首都ティンピーから5日間かけて標高3,600mを超える山奥にある村まで、郵便物を歩いて届ける配達人を追った作品だ。道中は、土砂崩れがあったり、橋が壊れて川を歩いて渡ったり、クマに遭遇することもあって危険にあふれているが、この配達人は、神に感謝の祈りをささげながら、25年間同じ仕事を続け、歩き続けてきたという。

ブータンはチベット仏教カーギュ派の教え

が大人から子供まで深く浸透し、人々の間の「互助・互恵」が徹底している。この映画の画面を見て、ブータンの国の国土の複雑さと起伏の多さをあらためて実感した。

またこういうミステリアスな国だから「幻の大蝶」が発見されることもあるのだ（『朝日新聞2012年2月21日朝刊、『ヒマラヤの貴婦人』ブータンの幻の大蝶、ブータンで幻の大蝶を発見、朝日新聞2011年12月15日、日本経済新聞2011年10月28日夕刊、幻のチョウ80年ぶり発見』）

ブータンの20県の特徴をみていこう。それには、これまで3回行われた、ブータンのGNHの世論調査をひもといてみたい。

ブータンは人口70万人。面積は九州をひとまわり大きくした広さで、図③のように、20県で構成されている。

ブータンではこれまでGNHの世論調査は3回行われている。しかし、第1回調査はブータン総研がタッチしていないので、ブータン総研は、第2回調査を第1回とし、第3回調査を第2回としている。最初の調査は、オックスフォード大学 OPHI (Oxford Pov-

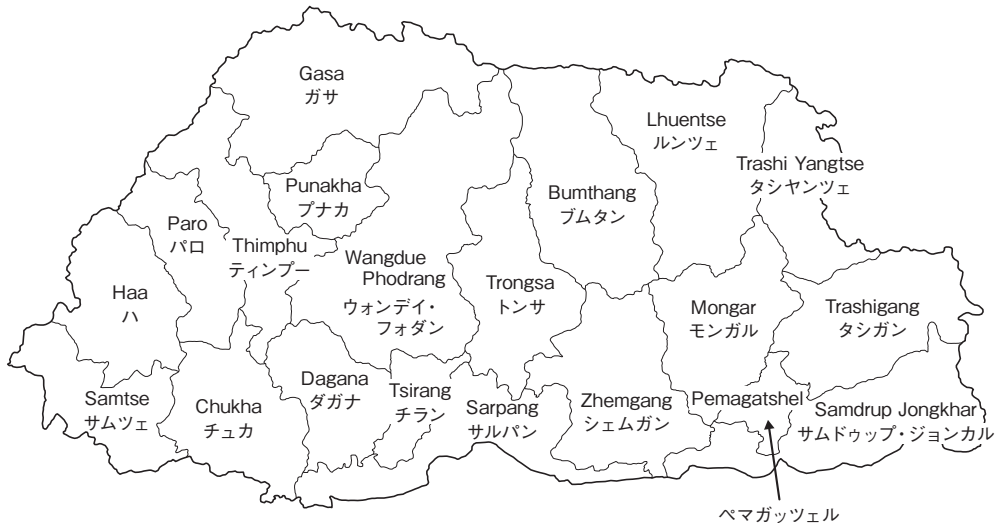
erty & Human Development Initiative) 所長のサビーナ・アルカイア博士が中心になって調査されたもので、2006年9月～2007年1月、15歳以上350サンプル、57の質問項目で行われた。ブータンを貧困な国と位置づけている。アジアの仏教的助けあいといった互助互恵は眼中においていない。

第2回調査は、ブータン総研が第1回調査としている2007年12月～2008年3月、15歳以上950サンプル、72の質問項目、20県中12県で調査している。この調査は、GNHの9項目中、環境をのぞく8項目について、調査結果の分析がいてないに行われている。

ブータン総研が第2回調査と呼ぶ調査は2010年に行われ8,000サンプル、249の質問項目、全20県で調査されている大部なものとなっている。

この調査結果は、各質問について、1点ごとカラーの図としてまとめられているだけで、データの詳細な分析などはない。図（主として円グラフ）をプリントアウトしたところ、段ボール2杯になり、第2回調査のように文章による分析や解説は一切ない。これをどうまとめたらいいいものかを後節で検討したい。

図③ Bhutan Map showing Dzongkhag Boundary



20県の分析については、これから少しずつまとめていくが、この分析は、ブータン在住歴が長く、旅行会社を営んでいるシデブータン・ツァーズアンドトレックの青木薫さんに協力をお願いした。ブータン各県を旅行という視点からとらえた見方になっていた。

簡単に考えて頼んだつもりが、青木さんの答え方をみて、ただならぬことを頼んだということがわかってきた。

まず青木さんは、1つの県の説明をするのに、例えばモンガル県であれば、標高400m～3,800mと書く。つまり、前述のブータンの映画「思いを運ぶ手紙」の映像のように、広い複雑な、ブータンの丘陵や、山岳地帯の地形（低い所から高い所）をおさえるのである。

つぎに、気温は、4.5度から36度。つまり夏は温度が高く、冬はわりあい低い。

トゥムシユラ峠（3,800m）から、リミタン（650m）へ一気に下がる移動は、ブータン国内のいかなる移動においても体験できない素晴らしいルートとされている。3,150mを一気に下るこの移動では、この地域の植物の多様性を実感することができる。年間気温は14.4度から29.3度。熱くて湿度の高い夏と、過ごしやすい冬の亜熱帯モンスーン気候より成り立っている。と、旅行会社の人ならではの視点を入れている。

ブータンは、日本のように、平野の多い所に住んでいるのと違い、起伏に富み、温度差も大きい。日本のようにどこに住んでいてもほぼ同じような自然の恵みのあるところでもないのだ。

以上のように、気温と、高度が県によって大きく異なるということが、ブータンの特性として理解し、20の県の気温と、高度を明らかにしていくことがまず先決となる。

では20の県について、アトランダムに特性を紹介しよう。

1) トンサ (Trongsa)

ブータンの中央に位置し、ブータンの歴史上非常に重要な意味を持つゾンがトンサゾンである。

600m～3,000m。-3.7度～29.2度。現王朝初代国王となったウゲン・ウォンチュクはトンサの領主（ペンロップ）であった。第4代及び現国王ともに即位の前にトンサペンロップに就任している。第3代国王の誕生地でもある。第1代、第2代国王たちの冬の政庁であった。

人口は13,344人。うち10,649人程度が農村地帯に暮している。県のほとんどが険しい地形にもかかわらず東西舗装道路、及びトンサ-ゲレフハイウェイがほとんどのゲオッグGewogとつながっている。ただし険しい地形のためこれにつながる農道不足のために、アクセスの困難な村々があり、これらの村は行政サービスの提供を受けることが困難である。一世帯あたりへの行政サービスのコストが高くなるのも行政の悩みである。

重要な地域でありながら、地形などの関係で、これまで大きな経済効果のある開発が行われなかった。ある意味貴重な地区で、シャーマニズム（ボン教）や少数言語、祭りや式典などがよく保存されている。

これはトンサがかつて東ブータンの中心地であった。伝統的にはペレラ峠から東を東ブータンと呼んでいた。

県の主要産業は農業と酪農。中でもジャガイモは重要な現金収入源。トンサ県ではブータンで収穫できる作物のほぼすべてがとれる。

シグミ・シンゲイ・ウォンチュク国立公園は、世界で絶滅の危機に瀕している動植物の宝庫であり、ゴールデンランゲール（金色の猿）の生息地である。

少数民族モンバが居住する地域としても有名で（トンサ南部）、彼ら独自の言語を話す。

マンディチュー水力発電の建設が始まっており、インド政府サポートで2017年秋には720MWの巨大発電所として立ち上がる予定

になっている。すでに道路拡張が大規模に行われており、今後プナツァンチュエ発電所景気と同様の建設景気が起ることを見込んでの動きも始まっている。

ツェリンマ・ドゥプチュエという、飲むと声が美しくなるという湧き水でも有名で、この水ゆえにトンサには歌姫が多いとプータンでは信じられている。

2) チュカ (Chukha)

標高200m~3,500m。年間気温は2度~30度。1987年にできた県。インドとの国境の町ブンツォリンを有する県で、ブンツォリンはインドへのゲートウェイであり、プータンで最も重要な商業都市であり、首都ティンブーについてプータン第二の都市。インド側のジャイゴンとともに発展し、形式上ブンツォリンゲートと水路が国境を分けるが、事実上往来は自由。

耕作農地が県の面積の9%前後。オレンジ、カルダモン、ジャガイモが重要な換金作物。農業には有利な気候にもかかわらず、農業生産性が低いのは、地形による村々への農道整備の遅れが一因と考えられている。

ブンツォリン地区は高所得であるが、ボンゴ Bongo やゲリン Grling、メタカ Metakha、ドゥンナ Dungna、などの地区は非常にアクセスのしにくい遠隔地であり、車では走行不可能なその険しい地形が妨げとなって、開発の遅れや行政サービスへのアクセスの困難さなど重なって、貧しい地区となっている。県内における所得格差及び生活水準の格差の大きい県といえる。

2011年時点でプータン最大の発電県であり、チュカ発電所とタラ発電所を持つ。バンク・オブ・プータンの本店がある。

また歴史的に、プータン最大の工業地帯であり、カーバイド、セメント、化粧合板などの工場がある。パサカにはプータン最大の工場地帯があり、プータンのタシ・ピバレッジによるコココーラの製造ラインもある。

県内の学校数は30。うち15はコミュニティスクール。県民の60%は水道にアクセスできる。

県内に3つの病院と8のBHU（診療所）がある。

3) タシガン (Trashigang)

プータンの東の端に位置する県で、民族グループの多さ、言語数の多さでも知られている。気候が穏やかで東プータンにあっては、水田が最も多い県である。県南部では陸稲が多い。にんにくの生産量全国一を誇り、トウガラシ、とうもろこしなどの生産量が多い。

少数民族プロッパが作るヤクの熟成チーズは、珍味として全国的に珍重されており、金銭で取引される。ティムシン、カンバラ村では極上のトウガラシが収穫され、全国市場で美味であるとして高値がつく。

手織りと染色が最も盛んな県で、手仕事での現金収入が現在でも生活の大きな部分を支えている。ラディ村周辺で生産されるブラと呼ばれる紬の手織りは、プータン人特にプータン男性の晴れ着の代表でもあり、祭りの時期には首都ティンブーで高値で取引される。

1960年代にプータンに滞在したファーザー・マッケイの功績で、高等教育が進んだ県としても有名。

プータン唯一の大学であった（現在は唯一ではない）シェラブツェのある県としても有名で、全国から成績優秀な生徒が集まる県でもある。カリン高校は現在でも統一試験の成績上位者を輩出する高校である。

ランジュン村には、工業専門学校があり、若者の都市流出に歯止めをかけ、地域の活性化に役買っている。

しかし棚田の多い農村地帯では農業の機械化が思うように進まず、若い世代の農業従事人口の減少に悩んでおり、米どころラディ村でも休耕田が目立つようになっている。

他県同様、新政府による農道整備が急ピッチで進んでおり、離農に歯止めがかかること

が期待されている。余談だが、電気が来る前に、携帯電話が利用可能になる村もあり、そういう村では電気のある村に出かける人が携帯電話を預かり充電して村に帰ってくる。

マイクロハイドロがオーストリアの援助によって早い時期にランジュン村に導入されている。

2011年の国内線就航により、以前よりあったヨンフラの滑走路を整備し、国内3つ目の空港として開港。DrukairとBhutanairlineが週2~3便飛ばしている(ヨンフラ空港は2012年5月より滑走路再整備のため1カ月はど閉鎖になる)。国内線による地域経済の活性化も期待されて、新しいホテルも数軒建設されている。これは国内線に加え、サムドゥップジョンカルからの観光客の入国も可能となったことも影響していると考えられている。

4) ダガナ (Dagana)

標高600m~3,800m。湿度が高く暑い夏と乾燥して寒い冬が特徴。外国人の立ち入りが長い間禁じられていた県のひとつ。

タガペンロップが治めていた土地であり、古くから山を越えて(ダガラ側)ティンパー側との交流が深く、南部ブータンに位置しながらブータン史に深くかかわってきた。1655年にシャブドゥンが建てた最後のゾンだと言われている。

道路網の整備が遅れていたため、インフラの整備が遅れており、電化されていない村も多い。その反面、文化習慣がよく保存されており、今後ツーリストの重要な訪問地のひとつになると予想されている。

あまり知られていないが、多くの聖地があり巡礼の場所でもある。日本の援助によるスンコシ橋の完成も、人や物の流れを大きく変えると考えられている。

ダガチュー水力発電所プロジェクトが始まったため、急ピッチで道路整備が進んでいる。人口25,070人。

昔からガロン(西ブータン人)とローツァンパ(南ブータン人)が村ごとに住み分けていたが、現在、再定住計画によって東ブータン人が急増している。

オレンジとカルダモンが換金作物の中心。ブロッコリー、カリフラワー、ジャガイモ、トウガラシ、トマトなどの換金野菜の生産も盛んで、バナナ、パッションフルーツ、なし、アボカドなど。オレンジはサルパンへ運ばれ輸出される。放牧も盛んで、牛乳から作る乳製品は重要な現金収入源でもある。

5) ハ (Haa)

西ブータン、パロ県の隣にあつて2001年まで外国人の立ち入りを禁止していた県である。2002年の国会にて外国人観光客にひらかれることになった。その理由は中国(チベット)との国境問題と、それをにらんでのインド軍の駐留地であることだといわれている。

北は中国(チベット)との国境を抱えており、ダムタンのゲートから北へは入域することができない。

険しい山岳地帯に位置する県で、米作はできず畑作と林業、牧畜に頼る。標高1,000m~5,600m。溪谷にさえぎられた閉鎖的な地域と考えられがちだが、実はインドへ南下するルート。またチュカ県(ブンツォリン)へ抜ける伝統的なルートも存在する。車でのアクセスは、パロとの間にあるチェレラ峠(3,800m)を越える方法と、パロ・ティンパー間にあるチュゾムから南回りにアクセスする2つのルートがある。

ブータンの中で、ガザ県について人口の少ない県である。世帯数は1,527、人口11,648(2005年)、12,588人(2010年)。年間気温-3.9度~26度、過しやすい夏と降雪のため寒い冬。

歴史的には、現王朝成立以前、国内のもうひとつの勢力であったドルジ家の領地であった。ドルジ家は国内最大のタシ財閥一族であり、現国王の祖母君に当たるアジ・ケサンの

実家である。タシ財閥は国内最大のビジネスグループを形成しており、その系列会社はブータンビジネス界のほぼすべての分野に存在する。

山岳地帯のため農業に適する土地は、県の総面積のわずか2%、その上標高が高いため作物が生長する季節が非常に短い。ほとんどの家庭では牧畜に頼り乳製品やヤク肉を提供することで現金収入を得ている。麦が主な農産物。ジャガイモ、リンゴ、カブなどの野菜。最近では高度を生かした薬草の栽培も盛んである。

病院1、診療所4。

新生児死亡率：16.1/1000（2005年）。

小学校3、中学校1、小中学校3、ノンフォーマルエデュケーション18箇所、分校2、国分寺1、寺院39、その他仏教施設9。電化されている世帯は1,896（うち187世帯はソーラーパネル）、村の世帯数よりも多いのは、オフィスなども数えていると考えられる。

6) シェムガン (Zhemgang)

標高200m～3,600m、温度8.9度～31.9度。冬暖かく夏は湿度が高く暑い。

26,278人、2,011世帯。一説には2005年以降人口減少が急ピッチで進んでいるという。

国中で一番貧しい県といわれている。総面積の約87%を森林が占め、原生林の率が高い。耕作地における焼畑の率が高い。

マナス国立公園を有し、今後エコツーリズムが期待される地域でもあるが、整備と人材育成が追いついていない状況。

野生動物の豊富さにおいては随一の県で、とくに愛鳥家のパラダイスである。各国で絶滅してしまったサイチョウが3種類観察できる県。

ゴールドラングールという金色のサルが生息していることでも有名。

学校28校、うちHSS 1、MSS 1、LSS 3、コミュニティスクール23、学生数は5,351、教師数187、識字率は56%程度。

水田面積は小さく全県で1,600エーカー程度しかない。

ティンティビとキカにミニハイドロがある。病院1、BHUが13。

竹製品の産地として有名。バンチュウ（竹製弁当箱）の産地。

ゲレフ・トンサ・ハイウェイの中間地点がシエムガン。

7) タシヤンツェ (Trashigang)

1992年にタシガンから独立したばかりの新しい県。東部県境がチベット（中国）とインドのアンナチャープラディッシュに接している。

標高1,200m～5,400m。気温1.9度～27.9度。人口19,314人（2010年）うち有権者13,749（18歳以上）、県公務員139人。人口密度13人/5km。

ブータン最大級の仏塔チオルテンコラが有名。チオルテンコラの祭りには、国境を越えてチャヤール側の少数民族も訪れる。グル・リンポテェが瞑想した場所に建つ仏塔は聖地（ネエ）でもある。

またゴモコラはタントンギャルボがかけたといわれる鉄の鎖の橋（ドクスム：現在は流出）のかかる村にある。ゴモコラの祭りにもインド側のタワンなどから少数民族が集う。

ダパと呼ばれる漆塗りの木の器で有名な地域で、かつては木地師と塗師の職能集団が閉鎖的なグループを構成していた。現在では、国立技芸院のタシヤンチー校で、その技術と伝統は広くブータン人の若者に門戸を開き継承されている。

小中学校5、中学校1、高校1、ノンフォーマルエデュケーションセンター17、学生総数5,739人。

病院1、BHU 7、医師1、ナース 14、ヘルスアシスタント5、医療技師4、伝統医療医師1人、伝統医療薬師1人。ベッド1床に対し、患者345人。

米、とうもろこし、麦、あわ、ひえなどの

雑穀、ジャガイモ、トウガラシは特に美味しいことで有名で、初物は王室にも献上される。

また農産物ではないが竹の産地でもあり、建築資材としてはもちろん、細工物用の竹も産出している。

固定回線247、インターネット62。

8) ガサ (Gasa)

遠隔地の県として有名なブナカの北に位置する県でチベット（中国）と国境を接している。1992年ブナカから分かれるまではブナカ県だった（最も新しい独立県）。ブータンで最も面積の少ない県。山がちのため耕作地に利用できる面積が非常に少ない（0.2%）。県面積の68%は森林である。標高1,500m～4,500m、夏は涼しく冬は寒さが厳しく、高地は雪に閉ざされる。

人口3,116人（2005年国勢調査）、2,970人（2012年の県のホームページによる）。

畑作中心だが牧畜と農業を季節交代で行わないと、生活が維持できない県。標高による気候の厳しさによる。牧畜による乳製品、ヤク肉販売が重要な収入源。馬・ヤクはトレッキングなどの荷役で、現金を稼ぐ。麦・ジャガイモ・野菜など。

家畜数10,328頭、うちヤクが7,545頭。

水田285エーカーに対し畑作地433エーカー。

ガサ県は長く車で県庁に到達できない県であったが、現在はゾンのすぐ下までラフロードが伸びている。県庁（ゾン）を中心とし学校、森林局、BHUや店が数軒の町というよりも村がガサの県庁所在地である。ゾンから30分下れば有名なガサ温泉があり、王家専用の湯殿があった。2009年のサイクロンによる豪雨で壊滅的な被害を受け、現在も復旧工事が進められている。ガサゾンはチベットとの戦の勝利を祝してシャブダウン・リンポチェによって1646年に建てられたといわれている。

野生動物の多さを誇る。ターキン、ムスクディアなど希少動物も含まれる。

病院0、BHU 4、医師1人、ナース1人、

伝統医療医師1人。

識字率46.8%、若者の識字率56.9%。

初等教育終了：92.01%。

9) ルンツェ (Lhuentse)

北部をチベット（中国）に接しかつてはチベットとの重要な商業ルートであり交易路があったが、中国のチベット侵攻や中印紛争によりこのルートは閉ざされた。標高600m～5,800m、気温1.3度～27.1度。

世帯数2,828、人口26,668。

農業と手織りの県、元々は自給自足で、手織りで現金収入を得て不足のものを購入するのが伝統的ライフスタイルだった。

現王朝の発祥の地がダウンカルであり、グル・リンポチェや、ペマ・リンパなど高僧の聖地が多くあることで有名である。住民は一般にこれらに大変誇りを持っており、プライドが高い。美人の産地としても有名。

「ドゥナ・グ」といわれ穀類がすべて（9種類）収穫できる温暖な土地としても有名で、レモンガラスの産地でもある。

巨大なグルリンポチェ像タキラも建設中で、信仰心の高い住民としても知られている（ニンマ派）。ゾンはカギユ派。

手織りの産地として最も有名な場所で、高級手織物の産地であり多くのすばらしいキラやゴーを産出してきた。特に女性のキシユタラといわれる、最高級織物の産地として、コマ村が有名である。

ガンズルという焼き物の産地（ダウンカル郡）でもあり、このなべで料理をすると美味しいと人気である。

農村の電化は68%。

教育施設の整備がやや立ち遅れている県のひとつで、多くの学生（クラス9以上）がタシガンやモンガルへ出て寮生活を強いられていた。タンマチューにクラス10ができ、ランチー高校が（クラス12）が整備された。現在ミンジーにもうひとつクラス12の学校を建設中。

10) モンガル (Mongar)

モンガル県は首都から東に450kmに位置し、いずれの外国とも県境を接していない内陸県である。ブータンで2番目に大きい県。標高400m~3,800m、気温4.5度~36度、亜熱帯性気候が南部と低地に広がっている。夏は暑く湿度が高く、冬は割りに温暖。

トゥムシンラ峠 (3,800m) からリミタン (650m) へ一気に下る移動は、ブータン国内のいかなる移動においても体験できない素晴らしいルートである。3,150mを一気に下るこの移動では、この地域の植物の多様性を実感できる。

人口40,654人、7,348世帯。

とうもろこしの収量が多く米の収量も多い。農業と酪農が中心。

ウェンカルには JICA の農業試験センターがあり、県内の換金作物の指導などを行っている。

県内の教育施設は50、うち1は私立。9,000人の学生が学んでいる拠点病院1、BHU 22。

妊婦死亡率 (MMR) 8.9/10000、新生児死亡率 (IMR) 8.2/1000。

医師12人、看護婦57人 (2010年)、モンガル県庁に近い拠点病院は ICU を備えている東ブータンの医療の中心でもある。

クリチュー水力発電 (60MW)。

県民の大半はツァンラカを母語とするツァンラ (東ブータン人)、他にケンカ、プムタンカ、チャリカなども話される。

手織りもタシガンやクルテ同様盛んで、現金収入源となっている。また、ブータンの染色に欠かせないラック虫の本拠地であり、ヤディなどで高度差を利用して養殖されている。ラックは臙脂色が染まり、インド、タイ、ミャンマーなどでも利用されるが、ブータンはラックの本場である。

教育は地理的要素もあってか昔から学校が他の地域よりも多かった県。他県からの学生も多い。クラス12の学校が2、クラス10まで

が6、クラス8までが41。またノンフォーマルエデュケーションという、識字率向上のための教育システムが66箇所。正規の学校に何らかの理由で通うことができなかった農民たちの助けとなっている。

2000年くらいから街が一気に整備され商業地区が広がった。車社会へ突入したブータンの典型的な地方都市のひとつで国民による国内移動の分岐点となる拠点の町でもある。ルンチーを訪問する観光客はほとんどがモンガルに宿泊する。

11) ペマガツェル (Pemagatshel)

県の面積が517.8平方メートルという、ブータンで一番小さな県でその土壌は非常にやせている。かつてはオレンジがよくとれ、東ブータンのオレンジの産地でもあった。ほとんど平坦な地がなく、切り立った山脈と斜面、狭い溪谷によってなりたっており、ブータンの特徴的な景観を持つ県のひとつである。標高は1,500m~3,000m。鉱物資源 (セメント、石灰) の採取場で近年有名となった。一説には採掘工場ができてから周りのオレンジの産量が悪くなったという話もあり、自然資源採掘の是非が問われる時の例として引き合いに出されることもある。

与党党首 (現首相ジグメ・Y・ティンレイ氏) のルーツの県であることから、2008年から活気づいてきた。首相はブータン正月などには地元で弓の大会などを催し、県民に娯楽の提供をつとめている。歌の名人が多いことでも有名で、初代 Durk スターのジャンペルヤンゾンもこの出身。ブータンで知らぬ人のいないほどの国民的歌手であるジグミ・ドゥッパもペマガツェル県の人間である。

水田が少ないことが特徴の県で、61歳の女性の話によると「混ぜ物のないお米を食べることができたのは正月だけだった。」そうだ。ブータン一の米どころであるプナカの年間の米の収穫量が12,981トン、この県はわずか95.7トンで、プナカでは1エーカー当たり

1,524kg取れる米が、この県では65キロ程度しか収穫できない（2009年統計資料による）。

手織りが盛んなので、織物を買って、その現金でサムドゥップジョンカルまで行き、安価な米を買うというライフスタイルは今も続いている。

傾斜地が多いこと、土壌がやせていることなどから、全国でも貧しい県のひとつに数えられ、リセトルメント（再定住計画）によって、南ブータンに移住する家族も多く、人口減少に悩む県のひとつである。

12) ウォンディ・フォダン(Wangdue Phodrang)

内陸に位置し外国との国境を有していない。標高800m～5,800m。-5.5度～29.5度。夏は暑く冬は温暖で過ごしやすい。ブータンで2番目に広い面積を持つ県。

人口28,079人。

何と言っても現在はプナツァンチュー発電所景気にわいており、農家の作物をわざわざ首都ティンプーに運ぶことをしなくても、発電所建設に働くインド人やブータン人に販売できるという。また整備工場や車両・借家などのオーナーに、大きな現金収入をもたらしており、このバブル気味の活気は発電所が立ち上がるまでしばらく続く。バスチュー発電所の第一期、第二期工事も県に大きな経済的効果をもたらした。

ただこれらの大規模な開発のため、自然環境はかなりダメージを受けており、絶滅危惧種のシロハラサギの餌場などが、土砂によって汚染されたりしている。プナツァンチュー発電所のために削られた山は無残であり、この地域を見るだけでは、エコなイメージのあるブータンへの期待は大きく裏切られる。

病院1、BHU11。

学校29校、うちHSSが1、MSSが2、LSSが3、PSが1、20のコミュニティスクールと分校が2。大きな県のため通学距離が長い傾向がある。父兄たちからの寮完備のリクエストも多い。学生数は7,212人、教師の数

248人。47のノンフォーマルエデュケーションセンター。

固定回線755、ケーブルテレビ回線：データなし。

最も高度の高い場所にある郡はフォブジカ、ガンテであり、畑作と牧畜によって成り立っている。県内で最も家畜の数の多い地域で約39,380頭、うち牛が27,760頭である。養鶏（卵）も盛んで約7,800羽の鶏が数えられる。一世帯あたりの家畜の数が全国一といわれている。

標高の低い場所では米作が盛んで、美味しい白米が取れることでも有名である。

ガンテは西ブータン最大のニンマ派寺院としても知られており、多くの信者が訪れる。王家のメンバーも重要な法要の時には必ず参加される、国内でも最重要の寺院のひとつである。ガンテ・トゥルクという高僧によって束ねられている。

13) ブムタン (Bumthang)

総人口は16,116人（ブムタン県の同じデータに11,913人という数もあり）、ブータンの中央に位置し北はチベット（中国）との国境線を持つ。高度が高く、平地の続く高原を持つ県である。標高2,400m～6,000m、そのうち約59.3%が森林である。-8度から24.4度程度。

畑作中心。酪農県としても有名で、スイスの援助が早い時期から入り乳製品やリンゴジュースなどの生産に生かされている。養蜂も一部で行われている。ヤク、羊も多い県。高度が高いため、2002年まで稲作は行われていなかった。そのため主食としての蕎麦食の伝統がある。現在ではわずかに中国の高地に向く稲が作られている。

ジャガイモ、小麦、そば、リンゴ。

ミニハイドロ1、マイクロハイドロ2。

蕎麦畑から現金収入の良いジャガイモへとどんどん転作されており、このジャガイモ収入と質の高い乳製品を生み出す酪農収入が景

気を支えている。加えて冬虫夏草の採取・販売が県民に開放されたこともあって、この地域の現金収入を押し上げている。

また高地の薬草収入と、ウラ村を中心にとれるマツタケも重要な現金収入のひとつとなっている。

ブータンの聖地としても有名で、グルリンポチュ、ペマリンバなどの高僧にかかわる聖地が数多くあり、ブータン人が人生の間に一度は訪れたいと願う巡礼の地でもある。ブータン県民もそれを大変誇りにしている。

もちろん観光客も例外ではなく、ブータンを訪問するなら必見の場所でもある。数多くの寺院、景観が外国人に好まれ、多くの観光客が訪問する場所である。昨年、オープンしたバツパラタン空港（国内線）も、景気を持ち上げており、これらを見込んでホテルの開業も続いている。

一般に郷土意識の高い県民性。加えて早くから教育程度が高かった場所のため（仏教伝来の地、チベットの高僧が多く招かれた、現王朝が治世をしいていた場所でもあることなどから）、多くの優秀な人材を輩出している。

14) チラン (Tsirang)

国土のほぼ中央に位置するブータンで2番目に小さい県である。が、県の全面積のうち約42%が耕作地であり耕作地に水田の占める割合が最も高い。標高差と気温差が農業に適しており、今後も農業センターで大きな可能性を持っている。穀類の余剰が出るほど収穫できる。

標高400m~3,500mに位置し、夏は高温(32度程度)で多湿、冬は乾燥して寒いという気候。

オレンジ、バナナ、カルダモン、ジャックフルーツ、ライム、サトウキビなどの産地で、カルダモン、オレンジは重要な輸出品目。特にオレンジは現金収入の最重要な作物である。ジャガイモ、カリフラワー、キャベツなども豊富で、標高差を生かしての一年を通した農

業が可能である。

また、ゲレフはもちろん大消費地ティンブーへのアクセスがブータン国内の標準から言うとは非常に便利で(約7時間)、これが生産性をあげる一因ともなっている。作れば売れる。

住民は主に南ブータン人(ローツァンパ)で、主にネパール語系の言葉が話されている。政府主導による再定住計画の対象となっている県でもあり、主に東ブータン人の新住民が移り住んでいる。

電化の遅れた地域でもあり、電気を待つ住民もある。

文化的にはネパール色が強く、結婚式などもヒンドゥ教スタイルで行われている(南ブータン人)。ブータン仏教のお寺もあり、混在した文化や言語が面白い地域。しっかり農業すればちゃんと成果が出るという、ある意味、土地に恵まれた県である。

県庁所在地はダンブー。自然が豊かに残されていることもあり、バードウォッチングには最適の場所。

ブータンの南部の低地の県の特徴として、マラリヤ、デング熱、狂犬病が発生する。また腸チフスも夏場に出現する。

作物が豊かなため現金所得だけでは測ることのできない豊かさを感じる県でもある。

15) サルパン (Sarpang)

サルパン県はインドと国境を接する中央南部の丘陵地帯に位置する。東にはマナス国立公園、西にはフォフソ野生動物保護区が存在する。7,346世帯、約41,300人の人口。1950年代初頭にはすでに道路へのアクセスが可能であったサルパンは国の中でも古い市街地のひとつである。県の総面積のうち耕作地は12%。水田と畑作地の割合はほぼ同じ。緩やかな傾斜が多い県のひとつ。標高200m~3,600m、年間を通じ10度を下がるのが珍しい温暖な気候であり(夏季は30度を越える)インドのアッサム平原とつながって

いる。平地を生かしての農業セクターの発展は目覚ましく、今後の国内農作物生産量の増加への貢献が期待される県のひとつである。特に灌漑設備が整った場所ではエーカーあたりの収穫量が多い。

2012年開港を目指したゲレフ空港景気で、ゲレフ（サルパン県の経済の中心）の市街地の土地は急騰し、空港景気に沸いている。加えて2008年よりこれまで外国人に開放されていなかったゲレフ・ゲートからの外国人観光客の入出国が可能となったため、市街地ではツーリストを見込んだホテル建設や再整備（改修）が活発化している。

もともと、南ブータン人（ネパール系）の多い土地であったが、政府主導の再定住計画により、高地の少ない県の中心から住民が流れ込んでおり、多民族地帯の様相を呈している。多くの家庭は両親がサルパンに再居住し、子供世代は首都で働き現金収入を得て、それを仕送りしている。

伝統的に標高の高いブムタン地方の寺院や仏教学校の僧侶たちが冬を過ごす場所でもあった。また、急激なニンマ派信者（東ブータン人）の再生定住によってこれらの宗派を中心とした寺院の建設が活発化している。

主な生産物：びんろう、みかん、ライム、バナナ、パパイヤ、マンゴー、ジャックフルーツ、カルダモン、生姜、グアバ、など換金性の高い作物の産地として、今後も有望視され、新住民もチャンスの多い土地といえる。

かつてはマッチやろうそく、石鹼、砂糖、レンガ工場などがあったが、現在ではほとんどみられない。今の中心は、製材工場（ベニヤ板工場、Army Welfare Project (AWP) かつては退役軍人のためのプロジェクトだったが、現在は NGO となっている）の醸造工場があり、ここが国内産の酒類の生産をほぼ独占している。

特筆すべきはゲレフ郊外には警察官養成学校があり、全国から警官を目指す若者が集まっている。

野生動物と人間の衝突も問題となっており、特に野生動物の捕獲はブータン側では違法なため、国境を越えてブータン側に流れ込んでくるといわれている。野生象の群れに襲われた農民が死亡する事故もおきており、電気柵などの対策も講じられているが、あまり効果が上がっていない。トウモロコシ畑やバナナ畑、水田が収穫の時期に被害を被っている。

動物や鳥の種が豊かで、自然愛好家のツーリストグループにはあこがれの場所である。解放されたばかりのロイヤル・マナス国立自然公園・ジグミシンゲイウォンチュク国立自然公園・フィプス野生動物保護区などに生息する動物や植物の多様性はすばらしい。今後、国内空港が整備されれば、観光客の新しい訪問地としての可能性を秘めている。

また旧住民と新住民の織り成す多民族性も魅力のひとつに。日本人の好きな温泉もあり、ブータン人の冬（農閑期）の湯治場ともなっている。

16) サムドゥップ・ジョンカル (Samdrup Jongkhar)

インドと国境を接していることから、ゲートウェイであるサムドゥップジョンカルの町は古くからの商業地区。

しかし県全体で見れば、国内では貧困県。貧困層が全県民の3割ほど存在する。この縮小と食料自立のための農業技術の提供が急がれている。県を農業によって自立させ「GNH 県」とするというユニークな取り組みが始まっている。

人口35,502人（2010年）4,371世帯。

寺院135、仏塔321。

植林による高級木材が有名。耕作地のほとんどが畑作で、とうもろこし、小麦、大麦、雑穀、マスタード、柑橘類、ジャガイモ、しょうがなど。

標高200m～4,000m、年間気温4度～27.5度。

2008年に75%あった、クラスPP（初等教

育準備学年) ~クラス10までの就学率は2011年には82%へと増加している。

失業率は12.3% (2010年)。

妊婦死亡率 (MMR) 1.3/1000、新生児死亡率 (IMR) 9.1/1000。

インドからの独立を掲げ過激な行動を繰り返しているゲリラの拠点となったこともあり、一時期外国人の立ち入りが制限されたが、2004年の掃討作戦成功後急速に発展整備された。現在ではサムドゥップ・ジョンカルゲートからのツーリストの入国も認められており、これまではありえなかったサムドゥップ・ジョンカルゲートへ入国した、出国するという東ブータン訪問だけを目的にしたグループも出現している。またサムドゥップ・ジョンカルへはインドのゴハティ空港から国境を越え入国することも可能。

17) プナカ (Punakha)

面積からは全国18位と小さな県である。北にガサ県が位置し、ガサへの入り口ともなっている。標高1200m~4800m、年間気温-4度~35度、亜熱帯気候に位置して年間を通して暖かい。夏は湿度が高く暑い。多くの植物がみられる場所である。

人口21,674人 (2010年)、1,891世帯、人口の87.1%が農村地帯に暮している農業県でもある。プナカでは美味しい米が取れることでも有名で収穫量も全国の上位に位置する。二期作も可能な気候。年間を通じて温暖な気候のため、ほぼすべての作物が取れるがメインは何と言っても米。麦、とうもろこし、マスタード。柑橘類や亜熱帯性の果物。なしやグアバ、モモ、プラム、柿など。そのほかいろいろな種類のトウガラシ、大根、キャベツ、豆類、ナス、葉物野菜。

1955年にティンブーが恒久都市となるまではプナカは冬の都であった。現在でも大僧正 (ジュケンポ) 以下中央宗教委員会は、ティンブーとプナカを季節移動している。(夏はティンブー、冬はプナカ)。

プナカ・ゾンはブータン国内で最も重要なゾーンであり、現国王の戴冠の儀や婚礼の儀も行われた。

農道の整備がすすんでおり、農家は割りに容易に作物を消費地に下ろすことができる。

コマ温泉、チュブ温泉など、いい温泉があることでも全国に有名な県で、農閑期には農民が湯治に訪れる。

また歴史上も重要な場所であること、来るまでのアクセスが容易なこともあって、観光客の人気スポットでもある。

病院1、BHU (診療所) 6。

私立学校1、小学校2、小中学校4、中高校4、高校4、分校10、ノンフォーマルEDセンター28、教師：382人。

18) サムツェ (Samtse)

ブータンの最も西部に位置しインドから出ないとアクセスできない特殊な県である。ブータンにあって、現在、外国人観光客の立ち入りが認められていないただひとつの県。西ベンガル州とシッキム州に国境を接している。

標高200m~3,800m、年間気温14.4度~29.3度、暑くて湿度の高い夏とすごしやすい冬。亜熱帯モンスーン気候。気候温暖で年間を通じての農業が可能であったことからかつては分割されパロ・ペンロップなどの各地の豪族の支配下にあった。県の一部が2006年にハ県に組み入れられた。

森林面積は県の68%をしめ、農業地は8%と国内では高い水準。

ブータン王立大学教育学部、旧NIE (国立教育専門学校) があり、中学・高校・短大レベルの教師の育成ができる。国内の中等・高等教育機関に多くの卒業生を送り出している。

米、とうもろこし、オレンジ、バナナ、マンゴージャックフルーツなどの果物が実る。年間を通して気候温暖なことから、商業ベースでの農業経営が可能である。オレンジやカ

ルダモンの栽培も盛んで輸出品目として重要で、インド、パングラディッシュに輸出される。しょうがの栽培も盛んである。

セメント工場や果物加工工場もあり AWP の酒造工場もかつてはこの地にあった。

牧畜も盛んで牛乳加工品目（チーズ、バターなど）も、現金収入の重要な部分を占める。

19) パロ (Paro)

ブータン唯一の国際空港を擁する県。ブータンでもっとも肥沃な土地のひとつであり、それをいかして海外農業援助プロジェクトが活発に行われてきた。パロの農家はブータン一豊かといわれるほどの農業県であり、それを支えるのは勤勉で負けず嫌いな県民性だといわれている。

農業・放牧（冬には標高の低いチュカ県に下ろす）を中心に高い生産性を誇る。故西岡京治氏（ダショー西岡）が農業指導を行い技術の底上げをしたことでも知られる。またパロの割に平坦な地形を生かしての農業の機械化は、労働負担を減らし生産性を画的にあげた。これにより農業人口の減少にも機械化で対応できている面があるといえる。水田面積は全国6位当たりだが1エーカーあたりの米の収穫量が一番多いという、つまり米作農業技術が高い県である。

パロはブムタン県について古刹・名刹の多い県として知られており、巡礼者の姿も多い。グル・リンポチェに関わる聖地も数多くあり、どれもよく保存され日々の生活の中で大切にされている。

国際空港があるため、海外からブータンを訪れる外国人はともかく一泊以上は過ぐす場所でもあり、観光客用のホテルの数も観光客向けの店舗の数もティンブーについて多い。

農業県ということもあり、現金収入だけでは測れない豊かさがあり、生活水準は一般に高い。特に食文化は豊かで、主食は米で一般

に蕎麦やとうもろこしなどの代用食を嫌う。乳製品をふんだんに使う。一部、高地に暮らす県民は、ヤクの放牧民であるが昨今の冬虫夏草のブームで現金収入が急増しており、高地の村だけでなくパロの郊外に自宅をかまえる人も多い。

農地所有もあってか首都ティンブーよりも伝統的なコミュニティが根強く生き残っており、人々の関係が深い。市の一部は開発ブームだが、ティンブーほどのボリュームはなくバランスのよい開発となっている。

北に向かって広がる自然国立公園地域を有し、野生動物の数も多く、また植物も多様である。ティンブーがすでにブータンではないといわれるのに対し、伝統的ブータンのすがたをよく残し非常にバランスの取れた県の代表といえる。

拠点病院はひとつ。

国技の弓が盛んなことでも有名な県で、余暇に使う時間と勤労の時間をメリハリのつけた生活スタイルが特徴。（農繁期には家族総出で働き、地方に出た親族も農作業に帰ってきたり、帰れない事情があれば現金を送ったりして農を支えている。）

20) ティンブー (Thimphu)

ティンブー県はブータンの西部に位置し、1955年以来、ブータンの首都ティンブーがおかれている。1961年にティンブーが市となりブータンの首都として成長を遂げてきた。ブータン最大の都市であり、政治・宗教・文化・ビジネスの中心でもある。2000年代に入ってからティンブー市を中心とした発展は目覚ましく、急速に都市化が進行。

2005年以降、全国の農村部からの人口流出により、郊外の農地の宅地化が加速し市街地が拡大。都市計画の必要性が叫ばれているものの、現実の開発速度に政策が後手に回っている感がいなめない。

公共事業、私企業活動の拠点であることからブータン経済の中心。高額所得者が集中す

る場所でもあることから生活水準は高く市場には商品が十分あり活力にあふれている。娯楽施設も急増している。消費も貸付の緩和(2012年4月には引き締めへ傾いた)により急速に拡大、最も活力のある県のひとつである。特に住宅ローンが緩和(2012年4月には引き締めへ傾いた)されたことにより、郊外の農地は建築ラッシュの様相を呈している。

反面、犯罪や訴訟が多発する傾向にあり、かつての平穏なコミュニティが変貌の時期を迎えている。犯罪の増加は、経済活動の活性化に伴う所得格差の拡大、若者の加速する離農による就職難=失業者人口の増加、海外からの情報の急激な流入による影響などがあげられる。薬物・酒類にかかわる犯罪も増加している。

当然ながら教育機関が最多の県。私立学校他、専門学校の数、種類においても最多の県。

医療施設の設備もブータンでは最高水準。急速な車文化への変化に、食習慣がともなわず成人病の増加も目立つ。また精神科を受診する人が増加傾向にあるとの情報もある。アルコール依存、薬物依存の人たちのためのリハビリ施設もある。

日本で言えば東京のように全国各地から人が流入してくるため、言語・文化は多様性に富んでおり、ブータンで一番各地出身者に出会える県。

政治の中心であることから、ブータンでは珍しく残業する人が一定数存在する。商業的娯楽施設が他県よりも整っているため、逆に休日に家族が全員で過ごす時間は減少しているのではないと思われる。

以上20県の立地や、産業などを見てみると、極めて質素な状況にあり、地形も不揃いで決してラクな居住環境、経済活動環境、とはいえない。

生産物も、農業に適した県は、米、野菜、果物などができ、換金作物として、収入になるが、農業に不適な県は、経済的にゆとりが

乏しい。

その場合、ブータンの伝統織物の盛んな県であれば、ブータンの伝統衣装のゴヤキラの高級品を制作し、換金できる。

また竹細工などの進んだ県であれば、それを換金できる。

こうみてくると、自然に恵まれているとはいえるが、決して我々日本人のように、ノー天気、衣食住をおしみなく使っているわけではない。

厳しい自然環境の中に耐えながら、チベット仏教カーギュ派の教えに感謝し、「互助・互惠」のやりとりで、助けあい、支え合いながら、そこから生まれる幸福感を大切に生きている人達だ。日本人がむしろ贅沢をしているながら、それに感謝していないのではないかとさえ思えてくる。

ブータンの人達が、自然の恵みとチベット仏教の与える互惠に感謝して、心満ちたりしているということ、我々日本人も注目する必要があると思われる。

日本人も税金が上がったり大変だが、ほどほどに満足するという生き方のコツをみつけることも忘れてはならない。

拙書『幸福立国ブータン』(白水社、2010)にも随所に書いたように、ブータンの人達は自分よりもっと不幸な人やモノを助けようという思いが強い。

例えば、毎年シベリアからオグロゾルが越冬にやってくるフォブジカ谷の村の人達は電線を引くとツルのじゃまになるので、電気を長い間、我慢して暗くなったら、眠ればいいさで過ごしてきた。数年前オーストリア政府の援助で、電線を地中に埋める工事が始まり、電気に恵まれることになった。

こういうブータン人の辛抱強さ、がまん強さも、ブータン人の幸福感を高めているといえないだろうか。

またこんな話も聞いた。ブータンには切り花を売る花屋はない。鉢植えの花は持ち運びしているが、花を切って売るといことは、

御法度である。

日本人がブータン人の友人とお茶を飲んでいるとき、お茶のカップにハエが入った。ブータン人の友人は「大丈夫？」と聞いた。これはお茶が大丈夫かではなくて、ハエが大丈夫かであったという。ハエ一匹殺生してはならないというのがブータン人のルールである。

こういう心がけて暮していれば、不平不満はそう生じないであろう。

ブータン人の幸せ感から、我々日本人はもっと真摯に学ぶことも必要ではなからうか。

これは、特別なことではなく、例えば、ミュージシャンのエグザイルというグループの男性メンバー一人（ウサさん）がブータンへ行って、ブータンのお祭りの踊りを習おうとしたのを日本のテレビで見たのであるが、彼は、踊りにはかなり自信を持っていたが、いざブータンの人達の踊りをとり入れようとすると、つらくて涙をポロポロこぼしていた。最後には、すっかり身につけて踊っている姿が様になっていた。

やはり、ものごとの核心をとらえるということとは容易でない。ブータンの人達はそれを心得ている。日本の子供達への教育も、そういう根本的なところからしないと、かえって子供が不幸になってしまうのではなからうか。

我々は、ブータンの人達が幸せそうに見えるのと表面的に見るのではなく、人間（自他共に）にとって幸せとは何であるかをよく知っていることにもっと注目せねばならないだろう。

GNH 2010年調査の活用法

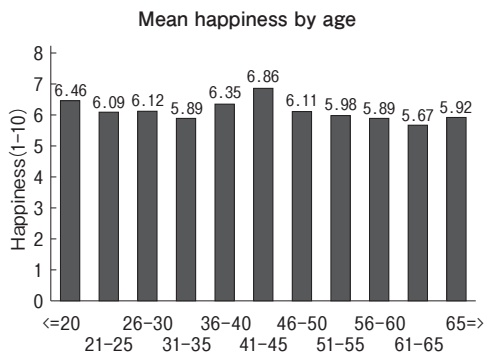
GNHの世論調査は、前述したように合計3回行われている（ブータン総研の考え方は2回）。その内最も規模の大きい2010年調査（8,000サンプル、249の質問項目、全20県で行われた）は、各県ごと、質問項目ごとカラーの図で公表されているので、それを全部

アウトプットすると、全20県で段ボール2杯となる。

しかし、このデータはうまく活用すれば、統計の専門でない人でも、有益な情報を得ることができる。

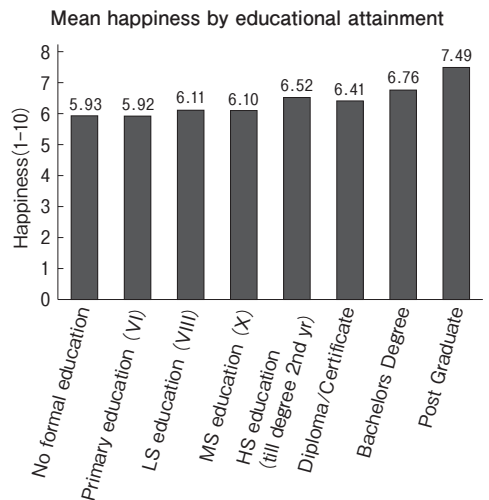
まずティンブー県のデータから、行政パーソンや、企業の人にとり出して活用できるという事例をいくつか示そう。

- i) 年齢と幸福度（20歳以下と41～45歳で幸福度は高くなっている）



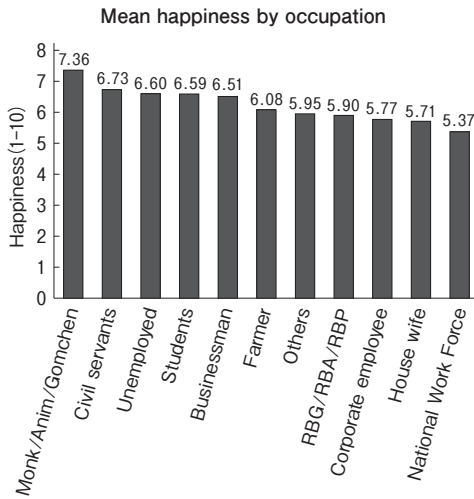
Source: GNH Survey 2010

- ii) 学歴と幸福度（より高い学歴を達成している人が幸福度が高い。しかし、あまり大きな差はない）



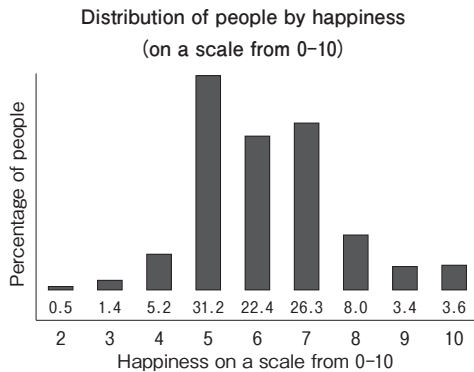
Source: GNH Survey 2010

iii) 職業と幸福度（僧侶、行政パーソン、学生で満足度が高い）



Source: GNH Survey 2010

iv) 5~7 の尺度の幸福度が最も高い。幸福度のバラツキは少なく、みなが同じように満足していると思われる。



元の原稿がカラーなので、白黒の紙面で示すには単色の棒グラフを使わざるをえなかったが、各249の質問について、一問ごと図示されているので、9ジャンルで一問ごと利用する立場の人が、引き出して活用すれば、各県の人々の動向がわかる。

行政パーソンや企業の方は、手許の頭の引き出しにしまっておいたつもりで、適宜取り出し活用し、他の20県のデータを比較しながら

活用すると有益であろう。

<まとめ>

i) 人々にとって、幸福といえる尺度とは、持続可能な構成要素で構築されていること（決して将来世代にツケを回すワリを食わせることがあってはならない）（表① HSM の構成参照）

ii) ブータンの20県の特徴

ブータンの各県は決して、均一の平坦な国土で成り立っているのではなく、起伏の多い多様な構成でできたエリアをブータンの映画「思いを運ぶ手紙」（第20回地球環境映像祭で大賞受賞、監督ブータン人ウゲン・ワンディさん）に如実に描かれているように、起伏の多い土地で、決してラクにモノを運んだりできる条件にはない。

しかし、そこで働く人（例えば郵便配達の人）は与えられた役割に感謝し、全力で職責を果たしている。

ブータン全20県の具体的な実態は、どの県も、絵に画いたような幸福を表わしているところでは必ずしもない。

むしろ、欠けているところ、補うべきところが多い。にもかかわらず、ブータンの人達は、自分達を幸せと神に感謝している。

日本人も、見かけのきれいなところのみを幸福の尺度とみるのではなく、助けあい（互助・互惠）などを見直す必要がある。

iii) ブータンも、ティンプーのような都市に住む若者は、先進国の都市生活にあこがれている面が多い。しかし、GNHの第2回調査（ブータン総研が第1回調査として分析した調査）をみると、

① デイグラム・ナムザ（家族・職場・学校・地域社会で「互助・互惠」を大切にす。ブータン社会のセーフティネット）が成立しており、93.9%が

“重要”としている。

② 人生の目標で大切なもの—家族生活 (95.1%) を大事にしている。

③ “ブータンの伝統を守ること” を
非常に重要 86.3% } 計98.9%
重要 12.6% }

(1989年1月6日に第4代国王がブータン固有の文化を守るようにとの布告を出している。)

この3点が超高い支持率をうけていることで、ブータン社会のワク組みは当面崩れないと予測できる。

今回の調査は、ブータンの20県の県別特性をレビューし、その内容からとり出したことは、ブータンのむしろ古い社会インフラ、自然環境の過酷さを明らかにした面が強かった。

しかし、そこをおさえないで、表面的にブータンをなぞっているだけでは、ブータンの真実に迫ったとはいえない。

ブータンのかかえている実態と、日本のかかえている問題は、あまりにもかけはなれてはいるが、幸福を考える上では、素通りできないことが分かった。

(東北大学大学院特別講師)

Summary

The Criterion of Happiness Learning from Happiness of Bhutan

Dr. Terue Ohashi

In the year 1976, the Fourth king of Bhutan, Jigme Singye Wangchuck (reign1972-2006) declared after the conference of fifth nonaligned countries, in Colombo “Gross National Happiness (GNH) is more important than Gross National Product (GNP)” He was just 21 years old, at that time. After that Bhutan is the symbol of the country of GNH. Every time when discussed about Happiness, Bhutanese GNH is one of the important concept of happiness.

From 2008 Bhutan reform the administration system to Parliamentairism. And 2008 published the constitution.

And in 2010, Bhutanise prime minister Jigme Y. Thinley declared in UN Conference, GNH is more important than GDP, so UN should declare the importance of GNH. So, GNH is famous keyword of Happiness. Now, Happiness is the trend of social movement, OECD propose happiness index every year.

And I (Terue Ohashi) work on happiness index HSM (Human Satisfaction Measure) for more than 10 years.

Ohashi's HSM included reduection of younger generation's unemployment rate and poverty rate.

I think it's not fare society old person enjoy happy, by the younger generation's burden. My HSM include the younger generation's unemployment rate and poverty rate.

By the way GNH country Bhutan is happiest country in the world or not.

I tried the reliety of 20 prefecture of Bhutan.

Bhutan is the very country with big ups and down, not smooth and frat.

And temperature is very changeable. But Bhutanese people help each other by the

religion. The Percentage of volunteer and donation is higher than Japan or Progressive Countries.

And Bhutanese people has three religious faith.

- ① In family, Community, Work place, school help each other, That is toled social safty net. (95. 1%)
- ② The Most Important in life is Family life (95. 1%)
- ③ It is also important to keep tradition of Bhutan (98. 9%)

This 3 are very helpful for happy and calm life of Bhutan.

We Japanese shold use our spiritual Side of our life.

(受付 平成24年 7 月 6 日)
(校了 平成24年 8 月 2 日)

本論文の著者大橋照枝元麗澤大学教授は、8 月 5 日に急逝されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。